

令和5年3月22日実施

いくの発 多文化共生を軸とした 子どもたちのつながりと居場所づくり



講師： 金 和永（きむ ふあよん）さん

（特定非営利活動法人クロスベース事務局長

特定非営利活動法人 IKUNO・多文化ふらっと事務局スタッフ）

今井 貴代子さん

（大阪大学社会ソリューションイニシアティブ）



♪こんなことをお話いただきました♪

生野区で「差別と貧困をなくし、ともに生きる社会をつくる」をモットーに子どもたちの居場所づくりを行っている「クロスベース」の試みについて金さん、今井さんにお話いただき、子どもの居場所づくり、多文化にルーツのある子どもたちの支援について学びました。

【生野区の特徴】

★大阪市生野区は2020年のデータによると、人口約12万6千人のうち、在日コリアンをはじめとする外国籍の住民が21%超を占め、国籍別では約60か国もの人々が暮らしています。総人口にしめる外国籍住民の比率の高い地方自治体として知られる長野県川上村19%、群馬県大泉町18.4%と比較しても高い比率であることがわかります。また、0～4歳の外国人の子どもはコロナ禍にもかかわらず増加しているという特徴があります。

★その生野区で多文化共生教育で知られ、「民族学級」の取り組み等で評価され「ユネスコスクール」にも選ばれた御幸森小学校が2021年に児童数の減少により隣接校と統合されました。もと御幸森小学校跡地は様々な国籍や世代間の「共生」をめざす「いくのコーライズパーク」という施設に生まれ変わろうとしています。その「いくのコーライズパーク」に「クロスベース」はあります。

【「クロスベース」活動の概要】

★学習サポート教室D0-YA（どおや）では小学生から高校生まで56人を継続的にサポートしています。自分のことは自分で決めるということを大事にしています。雑談がひじょうに長くなったりもしますが、必ず当事者である子どもと相談してその日やることは決める、ということをもットーにしています。

★体験活動事業では、例えば大学キャンパスツアーに参加したりしました。大学にそもそもイメージを持ってない子に大学ってこういうことだ、とイメージを持ってもらいたかったのです。

★学習支援で出会う子どもたちはさまざまです。例えば幼児期から日本で暮らし、日本語と母語のバイリンガルですが、学校教科で使われる単語はどちらの言葉も理解できない小学6年生。対応

としては、学校の宿題を解きながら、少しずつ勉強への自信をつけてもらうようにしていきます。

- ★在留資格が親の状況に左右される状態で、将来の見通しが立たず、高校を中退してしまった若者への支援は在留資格について定期的に確認しながら、目標を考えるとという指導をしていきます。

【子どもの語り、親の語り】

- ★『生野“日本語指導が必要な、子ども白書”』作成の段階で聞き取りを行った際、子どもからはいじめのエピソードがやはり多かったです。アイデンティティの承認が得られない苦しさも語られました。日本語ができると「ハーフ？」と聞かれたりするわけです。学習のつまづきもあります。理科、社会がかなり難しく、小学校の5～6年から置いてけぼりされ、高校に入ってからの世界史の授業ではもう一言一句わからないという状況も見られたりします。学習の困り感が日本語の課題として認識されないということもあります。親の手伝いで通訳として同行したり、親の在留資格の不安定、目の前のことで精一杯の子どもたちは「未来のことを考えるともうしんどい」ということになります。

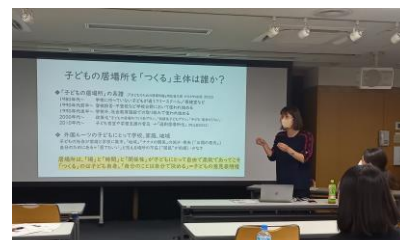
- ★親の立場にある人のききとりでははじめは、「何も困ってませんよ」とおっしゃるのですが、よく聞いてみると、地域社会との接点の少なさ、子どもに日本語能力への過度の期待や子どもが実は学習面で困っていることがわかっていない、などいろいろな問題が浮かび上がってきます。

【生きづらさや困難はどこから来るのか】

- ★そもそも子どもは自ら選んで日本にきているわけではないです。「わからない」が日々募り、言語やルーツにネガティブな目線や差別を受け、将来の見通しがなく、無力感にさいなまれます。同時に日本語がうまいということが大事とされ、「日本人みたいになりたい」という価値観に圧倒され、日本社会に同化されます。この二つの方向からの作用を受けた子どもたちは生きづらさを感じます。

【子ども・その保護者に関わる時】

- ★悪気がなくてもよくない声かけの例としては「日本語が上手ですね」。もしかしたらその人は日本生まれかもしれませんし、その人が日本人ではない、とういことを言外に示し、排除するというところに実はなっています。(お互いに日本語を学習中であるとはっきりして学習の成果が出ているというときはOKです。)



- ★「日本人ですね/もう日本人と一緒にですね」

日本人であることはよいことであるというメッセージとなっています。

- ★在留資格の制度や外国人児童、生徒の教育について、教育委員会が行っている施策を知っておきましょう。

- ★保護者が孤立していないかに注意しましょう。同国出身のコミュニティともプライバシーの問題等から距離を置く人もいます。

★日本に移住する前のその人のキャリア、文化へのリスペクト、関心を示すことが関係づくりの土台となることがあり、その人を大事にする、その人を輝かせるためにも大切です。

【これからも大事にしたい方法・「居場所」のあり方】

★居場所が複数あること・選べることをめざしています。目的なく、ただそこにいられる場所も子どもにとって絶対必要です。

子どもに多様なかわり方、居方ができる複数の場所をつなぐことも心がけています。

★自己決定を尊重します。その人の目標や選択を奪わない、勝手に決めないという姿勢を大事にしています。

★居場所は「場」「時間」と「関係性」が子どもにとって自由で柔軟であってこそで、「つくる」のは子ども自身。「自分のことは自分で決める」ことを心がけましょう。

★子どもたちはつねに「準備」ばかりさせられています。進学するため、将来のために必要だと言われ、学ばされます。外国ルーツの子どもが「今、ここで生きている」と思える手ごたえを得られるような学びこそ必要なのではないのでしょうか。

★課題を、個人のことや心理的なものとせず社会のもの、環境の課題として捉えることを私は大事にしています。

♡アンケートより♡

- ・外国ルーツの児童の学習支援にかかわっているのに関心があり参加した。子どもの居場所づくりについての課題がよくわかり大変よかった。
- ・日本社会になじんでもらうことをよかれと思って支援するだけでは問題の解決にならないということがよくわかった。
- ・学校でもなく、家庭でもない「第3の場所」の必要性が認識できた。

